

研究発表会発表要旨

二〇二二年七月十六日(土)
於 早稲田大学戸山キャンパス・三六号館三八二教室

〈早稲田大学哲学会春季研究発表会〉

イエナ期「知識学」の原理としての フィクションと実在性

——「絶対我」概念の再検討——

尾崎 賛 美

今回の発表では、イエナ期のヨハン・ゴットリープ・フィヒテ (1762-1814) の『全知識学の基礎』(1794/95、以下『基礎』と略記) において、その思想(知識学)の原理とされる「絶対我」について検討した。それに際しては、『基礎』の「第一根本命題」、「事行」、「知的直観」といった、この時期の知識学において重要な諸概念との連関から、「絶対我」概念の内実を考察した。先行研究を踏まえると、「絶対我」は、経験的意識一般の成立を説明する超越論的な原理として想定される抽象的な概念、すなわちフィクションに過ぎないと論じる立場がある一方で、意識における実在的な対象に基づき展開される知識学は、その原理(「絶対我」とともに実在的な体系であると論じる立場がある。発表者は、こうした相反する立場のそれぞれの論点を吟味するとともに、両立場においては主題的に論じられ

ていない、「理念」としての「絶対我」についても着目し、そのフィクション的な側面と、実在的な側面とを検討した。

一連の考察を通じて以下のことを論じた。第一に、フィクションとしての「絶対我」は、知識学という体系の出発点であると同時に終着点となる原理であり、こうした原理によって知識学は、フィヒテにおいてはその体系の完全性を示すとされる、円環構造を形成する、ということである。しかし、第二に、「絶対我」のそなえる実在的な側面は、こうしたフィクション的な原理に根拠づけられる知識学において要求される契機、すなわち、知識学を遂行する哲学者自身の実践において見出される、ということである。知識学は、それに従事する哲学者自身が行う自己内還帰的な活動への注視を通じて、その原理であるところの自我を实在的な活動性として捉えることから始まる。また、このような哲学的営為の内でのみ実在的なものとして捉えられる、自己活動性の自由が、我々の有限な自我がそこへと目指して努力すべきところとして掲げられる「理念」として、知識学の終着点となる。こうした自由の実在性は、経験的な知の対象とはならないが、それでもこの実在性への「信念」が、知識学に取り組むために要求される。以上より、知識学はフィクションとしての「絶対我」を原理とするが、知識学が哲学的な実践を通じて捉えられる実在性に依拠する点において、それそのものとしてはけっして空虚なフィクションに尽きるものではないことを提示した。

(早稲田大学文化構想学部現代人間論系助手)

〔早稲田大学哲学学会春季研究発表会〕

存在述語の様相形而上学的分析

繁 田 歩

イマヌエル・カントが『純粹理性批判』で、我々に可能な経験の領域を限界づけたことは広く知られている。その結果、我々に可能な対象は「現象」だけとなり、「物自体」や「ヌーメノン」と呼ばれる空虚な対象は批判のもとに断罪されるのであった。しかし、このよく知られた縮減的なカントの対象観は、「対象一般」という概念と平仄があわず、不十分である。

対象一般とは、ヴォルフ主義者の思想に根をもち、無矛盾対象をすべて容れる広範な概念であった。この概念はカントにも「存在と無について未規定的」な対象として継承された。興味深いことに、カントは対象一般を「カテゴリーの対象」とみなすことで、カテゴリーの普遍的妥当性を強調していた。

このように、カントには素朴に考えられていたよりも広い対象領域が想定されるのであるが、そこで問題となるのが、非現象的な対象の地位、という形而上学的な問題である。このこと

を際立たせるために、発表者はカントにおける「可能的対象」に注目する。特に、本研究は分析的カント解釈という研究方法を採用することで、カントにおける「可能的対象」の地位を、様相形而上学の観点から彫琢することを目指す。この比較的新しい研究文脈は、N・スタングを契機として、A・ステイブソンらによって展開されてきたものである。

本発表では、第一に、「現存在」概念が様相カテゴリーに含まれること、そして「可能性」の概念は存在しない可能的対象について機能していることを確認する。第二に、カントにおける可能的対象に関係する先行研究が現実主義を結論してきたという事実を確認する。現実主義とは、可能的対象も存在すると考えるD・ルイスの可能主義に対抗して、現実的対象のみが存在すると考える立場である。特に、カントは神の現存在の存在論的証明を反駁する際に、パーカン式の推論が成り立たないことを指摘しており、現実主義に親和的である。しかし、第三の論点として、カントは存在しない可能的対象に有意義な量화와述定を認めていたという事実を取り上げる。この点を強調したT・ローゼフェルトのマイノング主義的解釈を再検討することで、発表者はカントの可能的対象を説明する方途として「非存在主義」という第三の立場の有用性を指摘する。

(早稲田大学文学部哲学コース助手)

感情移入とはちがう仕方

——M・ガイガーの感情移入批判と芸術体験論——

峯 尾 幸之介

芸術作品の価値は、鑑賞者が、たとえば物語の主人公に「感情移入できる」こと、歌詞に「共感できる」こと、つまりは、他者と同じように感じる、ことができることによって、さらに言えば、それを容易にする、鑑賞者とその他者との近さによって決定されるのだろうか。本発表では、現象学者M・ガイガーによる感情移入批判と芸術体験論に注目し、感情移入や共感とはちがう仕方での芸術作品の体験とはどのようなものであるのか、そして、それがどのような意義をもつのかを追究した。

ガイガーの師でもあった心理学者Th・リップスがその美学においてまさに感情移入や共感を重視したのに対して、ガイガーはそれらが芸術作品の体験の仕方としては不当であるとして批判する。かれは、鑑賞者が、作品に描写された内容にのみ関心をもって体験すること、たとえば愛国者が自国の歴史を題材とする作品に熱狂することを批判する。本発表ではそれを、鑑賞者と題材と

の近さ、とそれゆえの共感しやすさゆえに作品をよりいっそう高く評価することへの批判として解釈した。そして、ガイガーは、鑑賞者が、日常生活においては体験したいが体験できないことを、作品に登場する人物に感情移入することによって体験し、楽しむことを批判している。いずれにおいても、鑑賞者は、芸術作品を目の前にしてなお、日常的な自己への関心をもっているにすぎず、芸術作品に特有なものに関心をもつてはいないのである。

ガイガーは、模倣芸術における描写の内容に対する描写の仕方の優位を主張する。かれによれば、美的価値のなかに、人体がもつ生命的な力のような「生」の契機、色がもつ心理的な気分のような「心」の契機というものがあるが、模倣芸術においては、描写の内容がもつ生や心の契機は「価値中立的」になり、描写の仕方にやどる生や心の契機こそが重要になるのである。そして、この描写の仕方は、芸術家によるものごとの把握の仕方を意味し、そこには「芸術的人格」の価値がやどる。わたしたちは、芸術作品のうちに沈殿し、線の描き方や色の選び方のような特定の構造契機のうちに客観化された芸術家の態度をもつて、ものごとを体験する。その態度は、わたしたちの日常的な態度、自己への関心にとらわれた態度とはちがいが、その態度において、わたしたちはものごとを「寛大に、真剣に、高貴に、見、感じ、体験する」。わたしたちは芸術作品に強制されることによって、芸術家が感じるような仕方でも、ものごとを感じさせられるのである。